

当報告の内容は、報告者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「参照文法書研究」（2017年度第1回〔通算第4回〕研究会）

Title: Studies on Reference Grammars (4th meeting)

日時：2017年7月15日（土）13:00–18:30

Date: Jul. 15, 2017 (Sat.)

場所：AA 研マルチメディア会議室（304）

Venue: Room 304, ILCAA

主催：基幹研究「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3）

Organized by Linguistic Dynamics Science (LingDy3)

1. 川澄哲也（松山大学，AA 研共同研究員）

「中国語の参照文法書について（兼）中国国内の言語研究紹介」

中国語の参照文法書は、中国語学と言語学のどちらに軸足を置いているかで構成・内容が大きく変わる。本報告ではまず、多くのメンバーにとって馴染みが薄いであろう中国語学の研究史ならびにその特徴を紹介し、あわせて中国語学の立場に拠った文法書の構成・内容を概観した。続いて、中国国外で出版された（英語による）参照文法書のうち、伝統的に定評のあるものと2016年以降に出版されたものからそれぞれ2点ずつ選び、章立て（検索の利便性）、中国語学用語の使用状況、解説と例文のバランス、非文の利用法、例文の表記法などの観点から各書の長所や欠点を指摘した。

2. 林範彦（神戸市外国語大学，AA 研共同研究員）

「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」

本発表では中国とその隣接地域であるチベット・ヒマラヤ地域、東南アジア大陸部に分布するチベット・ビルマ諸語の参照文法書について紹介し、その記述上の諸問題を論及した。発表中では、チベット・ビルマ諸語の系統分類の研究者間において不統一であることを指摘した上で、おおよその類型的特点（大部分の言語でSOV語順、声調言語的など）を紹介した。チベット・ビルマ諸語の記述でよく見られる術語 (sesquisyllable, tonogenesis, creaky/breathy vowels, conjunct/disjunct, mirativity) についても概説した。

中国国内で最近出版が相次いでいる「参考語法」シリーズの記述上の長所と問題点についても論じた。「参考語法」シリーズは従来の中国国内の参照文法書の中で最も豊富なデータと詳細な分析を整えている。しかし、画一的な記述が多く、各言語の特徴がまだ見えづらい点など課題も多い。近年では欧米などを中心に博士論文として提出された記述文法がウェブ

上で公開されていることも多く、特にチベット・ビルマ諸語以外の言語研究者が本地域の言語の概要を把握するにはそれらの資料をまず利用することが得策であると述べた。

3. Tun Aung Kyaw (AA 研特別招へい教授)“Problems Arising from Compiling a New reference Grammar of Modern Colloquial Burmese”

There are four major problems arising from compiling a new reference grammar of modern colloquial Burmese; they are (1) phonological, (2) morphological, (3) syntactic and (4) pragmatic.

(1) Main phonological problem is the difficulty in distinguishing sequences of loosely linked units or ‘noun phrases’ from sequences of units more tightly linked or ‘compound nouns’. Although most grammarians usually used juncture-feature, that is, open-juncture for phrase and close-juncture for compound, one criterion is not enough. Therefore many semantic, morphological and syntactic criteria have to be used all the time.

(2) First morphological problem is that there is no formal criteria for making the distinctions between the two grammatical relationships, that is, subordinate-head expressions and co-ordinate expression. Second problem is word-suffix homonym problem, and the third one is word-particle homonym problem. The last one is negative prefix problem.

(3) Syntactic problems are (i) the complexity in adopting morphological and/or syntactic criteria to make the distinctions among words, syntactic phrases and sentences, and (ii) ambiguity in the relations among several unmarked complements and that among marked complements.

(4) Pragmatic problems are (i) ‘negative sentence but question’ and (ii) identifying the sub-standard Burmese problem.

4. 澤田英夫 (東京外国語大学 AA 研)

「インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」

本発表では、インドおよびその周辺地域である南アジアに分布するチベット・ビルマ (TB) 諸語の参照文法書を紹介し、その記述上の諸問題についてまとめた。まず、対象とする TB 諸語の範囲を明らかにし、これら「インド側」の TB 諸語でより顕著に見られる現象として、クキ・チン系やヒマラヤ系の言語に見られる動詞の人称・数一致と、一部のクキ・チン系言語に見られる動詞の語幹交替を挙げた。これらの言語の記述文法の中で大きなウエイトを占めるのは、博士論文として書かれたものと、インドやその州の政府の機関が刊行したものであるが、「参照文法書」と呼べる内容を持ったものの多くは前者である。博士論文の執筆者

は南インド出身者とそれ以外とがほぼ半分ずつを占める。記述上問題となる概念・現象としては、(1) 語類（提示の仕方の種類、代名詞・形容詞などの語類の扱い）(2) 複合的単位の構造提示のしかた（特に動詞複合体と名詞句の構造がどのように提示されているか）(3) 語・接辞・接語の区別とその表示のしかた（具体例として格標識をどう扱っているか）(4) 「名詞形態論」の章を持つ文法書において、その下にどのような範疇や現象が扱われているか、以上4つを取り上げた。

以上4つの発表をもとに、最後に、文法書記述や、音声・音韻のレベルの表記方法などについて全員で議論した。